



Title	国家間の移動と教育に関わるコンフリクト : ブラジルに帰国した子どもたちを事例に
Author(s)	山本, 晃輔
Citation	大阪大学教育学年報. 2012, 17, p. 73-88
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12753
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

国家間の移動と教育に関わるコンフリクト —ブラジルに帰国した子どもたちを事例に

山本 晃 輔

グローバル化した世界において、国家間を移動し、出生地ではない場所で生活することが珍しくなくなりつつある。国家間の移動も加速化し、これまでにない様相をみせている。

本論文は移民のなかでも日系ブラジル人の子どもたちに注目した。日本とブラジル間での人々の往来は1908年にはじまる。近年ブラジルから日本へのデカセギが急増し注目が集まった。その後、2008年にブラジル日本移民は100年をむかえたが、世界的な経済不況の影響で多くのブラジル人が日本からブラジルへと帰国した。そのなかには多くの日本で就学していた子どもたちも含まれる。

様々な理由で日本からブラジルへと帰国した子どもたちはその後どのような生活を送るのか。国家間を移動する、あるいは移動の可能性があるということが、子どもたちの生活と教育にいかなるコンフリクトをもたらしているのか。日系ブラジル人の子どもたちの生活誌を事例とし、国家間を移動する子どもたちの複雑なライフスタイルの一側面を明らかにした。

キーワード：日系ブラジル人、国家間の移動、移民と教育

1. 問題の設定

グローバル化した世界において、国家間を移動し出生地ではない場所で生活することはめずらしくなくなりつつある。現在、世界中で2億人以上の人々が出身国以外で生活している。移民数も急増しており、例えばOECD諸国への移民流入数は1960年頃に比べて3倍を数え、昨今の世界的な経済不況にあっても移民は世界中でみられる（キリー 2010）。移民の流出入に関わる政策整備と権利保障は、世界共通の課題となり、国連は2003年に「国際移住問題に関する世界委員会（GCIM）」を設置しその啓発を進めている。

人々の国際移動は、前世紀を経て量的にも質的にも大きな転換を迎えており、これまでのように送出国と受入国といった二分法では語れない現状にある。国際企業の躍進や航空網の整備、労働力の国際的な拡散などを背景とし、近年はこれまで以上に複雑で多岐にわたる人々の移動がみられるようになってきているのである。

移民が多様化したことで移民研究も様々な分野でとりあげられるようになった。例えばBrettellとHollifieldによる“Migration Theory”によると、今日の移民研究は人類学、人口学、経済学、地理学、歴史学、法学、政治学、社会学で一定の研究がおこなわれている。扱われるテーマは理論的枠組みや対象を異にしながらも多岐にわたる（Brettell and Hollifield 2007）。

従来の移民研究では、移民を行う第一世代やエスニシティと教育関係が注目されていたが、近年ではその子どもたちである第二世代も注目されるようになった。例えば、移民の教育を扱う最も大規模な調査・研究としてOECDのPISA調査がある。PISA調査は、移民の子どもの学力が重要な検討課題とされ、2003年には“Where Immigrant Students Succeed: A Comparative Review of Performance and Engagement in PISA2003”を出版、これを発展的に継承し、OECD加盟国の移民政策と教育政策を包括的に研究する調査を

おこない、2010年に“Closing the Gap for Immigrant Students: Practice and Performance”という最終報告書を出版している。移民の子どもたちにたいして質の高い教育を提供することは、基本的な権利保障を遂行するというだけでなく、社会統合を果たすために必要不可欠な問題として位置づけられている。

このように、国家間を移動する人々の教育研究は、第一に、多様化、加速化する人々の国際移動の「横軸」としての問題と、第二に、その後の社会統合や世代交代に関する人々の国際移動の「縦軸」としての問題を考慮しなければならないのである。

こうしたなかで、日本においても移民についての議論が聞かれるようになった。例えば2008年、日本経団連が発表した「人口減少に対応した経済社会のあり方」では、今後の少子高齢化社会における労働力確保のため、移民政策の導入が必要であると明記された。移民政策という具体的な提言が行われたことははじめてのことであり、大きく報道されたことは記憶に新しい。

他方で、日本にとって移民政策は新しいものではない。本項で取り上げる日系ブラジル人は、そもそも日本移民である。ブラジル日本移民は日本国内の不景気を背景とした官製移民であり政治主導による移民であった。1908年に日本からブラジルへと渡った日本移民は、生活の糧を求めて渡った「出稼ぎ」である。日本移民らは、ブラジルで仕事をし日本へ帰国、「故郷に錦を飾る」ことを目的としていた。しかし、第二次世界大戦を挟み、多くの人々が永住を選択する。

永住を決めたことで、子どもたちはブラジルの国籍を取得し、ブラジルの教育をうけるようになった。そして日本移民の二世代目、三世代目は、日本人と呼ばれるのではなく、日系ブラジル人（Nikkei）と呼ばれるようになる。そして、1980年頃からブラジルの不況と日本の好景気をうけ、今度はブラジルから「デカセギ」が日本へと渡った。

このように、日本とブラジル間における日本人／日系人／ブラジル人の移動と移住は100年にわたり続いてきた。横軸を考えれば、日系ブラジル人は日本の「ニューカマー」外国人として、活発な国際移動の一事例として位置づけることができる。他方で、縦軸を考えれば、日系ブラジル人は日本とブラジル間における100年の国際移動の現代的な姿としても捉えることが出来る。こうした観点に立てば、日系ブラジル人を「日本で生活する外国人」という視座からではない語りもできよう。

国家間の移動は、両国の政治的取り決めを枠組みとして、就労環境、交通環境、移民受け入れへの市民感情など、さまざまな条件のもとで制限されるが、日本とブラジル間の往来は比較的容易な状況にあった。そして、子どもたちはブラジルへの帰国後も、往来が比較的容易な状況で生活し将来を企図している。

本研究ではこうした視点に立ち、日本での生活経験をもつ子どもたちが、帰国後にどのような状況にあり特にいかなる教育上の問題をもつのかを検討する。国家間の移動が子どもたちに与えるネガティブなインパクトについて検討することで、国際移動と教育の一側面を明らかにしたい。以下、まず二節では日本におけるニューカマー外国人教育の趨勢について概観する。先行研究の検討から日系ブラジル人の「流動性」を考慮した研究が必要であることを指摘する。三節では本研究の調査概要を、四節では子どもたちの生活誌を提示する。五節は結語として本稿のまとめをおこなう。

2. 分析の枠組み

2.1 日本における日系ブラジル人の教育研究

日系ブラジル人の子どもたちの教育に関する個々の研究は、「定住化」というキーワードと共に90年代後半からみられるようになる（例えば渡辺1995；広田1995；太田2000；志水・清水2001）。なかでも学校適応に関する研究が精力的におこなわれた。日本の学校文化が子どもたちに対して閉鎖的であることを看過した研

究（恒吉1998；太田2000）、学校適応には子どもたちの文化的社会的な状況が影響していることを指摘した研究（志水・清水2001；宮島2002）を指摘することができる。近年は、こうした日本の閉鎖的な学校文化のなかで、子どもたちが様々な戦略を主体的に駆使して生き抜く姿を描いたものなどがみられるようになった（山ノ内1999；児島2006；森田2007）。

他方、視点を転じて、ブラジルにおける日系ブラジル人の子どもたちの教育に関する研究は、ブラジルにおける文化的適応に関する研究を中心として試みられてきた（村田2000；光長・田淵2002；中島・根川2005；熊崎・天野2007）。例えば、光長・田淵（2002）による研究では、帰国した子どもたちが日本人としてのアイデンティティをもつのか、ブラジル人としてのアイデンティティをもつのか、それともバイカルチュラルなアイデンティティをもつのか、様々な事例からこれを明らかにしている。日系ブラジル人らの多様な適応過程を示唆した上で、ポストナショナリズム時代におけるアイデンティティが確固たるものではなく、ハイブリットなアイデンティティの在り方を示唆している。

以上のように、これまでの研究が明らかにしてきた問題は、どれも日系ブラジル人の子どもたちの教育の一側面を明らかにしているが、日系ブラジル人家族が「移動する人々」であるという視点が抜け落ちているように思われる。また国家間の移動は自由におこなわれるわけではなく、さまざまな諸条件と制限のうえに成り立つといった構造的要因の影響が充分配慮されていない。

日系ブラジル人家族が内包する「移動」という構造的要因は教育問題を考えるうえで重要である。例えば、志水・清水（2001）らによる日系ブラジル人家族の研究が示唆的である。志水らは、日系ブラジル人家族の教育戦略に「一時的滞在の物語」を見出す。すなわち、日系ブラジル人らは日本へデカセギとして滞在しており、日本滞在は一時的なものであるから、家族の教育戦略として日本での教育に積極性を見出すことができない。そして日本での滞在が長引くにつれ、「一時的滞在の物語」は、日本での生活を続けるか、帰国するのかといった揺れを生じさせる。こうした、日系ブラジル人家庭の場合、家庭内の物語が変容することで、日本で生活するのか、それともブラジルで生活するのかという、両国を視野に入れた将来選択が行われるようになるという指摘は重要である。

また、日系ブラジル人らの家族関係は、親の就労形態に強く規定されている。関口（2003）は、日系ブラジル人の親たちが、フレキシブルな労働力として働かなければならない状況にあるため、家族の関係構築に難しさがあることを指摘した。日本の学校で生活する子どもたちは日常的な日本語を身につけていくが、昼夜を問わず働く親は日本語を覚える機会もない。すれ違う生活時間のなかで、家族のコミュニケーションに困難が生じる。こうした状況にある日系ブラジル人の子どもたちの社会適応を段階的に捉え、世代間の文化変容の不協和が子どもの学校不適応を生み、脱学校化、周辺化・疎外化されたアイデンティティ（関口2003:325）が形成されるとした。これは、日系ブラジル人家族らの問題が、家族の問題としてのみ還元できるものではなく、彼らのおかれた極めて厳しい就労形態によって規定されていると理解できる。

デカセギで日本へと渡った経験を持つ日系ブラジル人の今日的な状況を考えたとき、両国間の移動は見逃ごせない論点である。周知のように、日系ブラジル人の日本での在留資格は、入国はもちろん就労についても制限されない。そして、渡日にあたっての複雑な諸手続きや渡日後の就労や生活を支えるのが、日本とブラジルを繋ぐデカセギビジネスである。

日本とブラジルを繋ぐエスニックブローカーは、労働市場とバランスをとりながら日本に向けて安定した労働力の供給を目指す。日系ブラジル人らは、ブローカーを利用することで、見知らぬ海外で仕事を探すというリスクを低減させることができる。ただし、この両国を繋ぐデカセギビジネスは、買い手の要求によって構築されている点が重要である。すなわち、日系ブラジル人らは、低いリスクでの渡日と就労が可能とな

るものの、その雇用は日本の経済状況に左右され不安定なものである（梶田他2005:259-284; 丹野2007）。

こうした不安定さは2008年のサブプライムショックで顕著なかたちで明らかとなった。サブプライムショックでは、日本定住を決めていた人々も含め、多くの日系ブラジル人らがブラジルへと帰国することになった。フレキシブルな就労が求められる日系ブラジル人にとって、「子どもの教育が滞日意識や実際の行動に影響を及ぼしている比率は決して高くなく……親の生産活動のいわば従属変数であった、企業や工場が変わるのに伴って教育も移動することを強いられる」（梶田他2005:282）状況にある。

日系ブラジル人の子どもたちは、学校教育などの社会環境や家族の就労形態によって、その生活が強く規定されるだけでなく、人々の流動性の高さによっても規定されている。こうした生活環境において、子どもたちは将来を展望するのである。

2.2 国家間の移動と二世代目研究

以上のように、日系ブラジル人の「流動性」を考慮し、移動する子どもたちの適応や葛藤について分析するうえで参考になるのが、移民二世代目の同化研究である。例えばPortesらアメリカの研究グループは、移民する人びとの「家族」「子ども」に焦点をあて、移民二世代目の適応の難しさと複雑さを明らかにしようとしてきた。そしてそれは単線的な適応ではなく、移民の世代交代のなかで「分節的同化（Segmented Assimilation）」をみせるという（Portes 1995;Portes and Rumbaut2001;Zhou 1997）。

移民二世代目研究で重要なのは、エスニックグループ内も一枚岩的ではないということである。まず、一世代目の移民が、人的資本や業者や家族を通じて移民する。しかし移民らが世代を経ることで、ホスト社会にどの程度同化していくかはさまざまである、（Portes and Rumbaut 2001:53）。一世代目が形作る就労状況や生活環境によって、次世代の移民らの同化は分節化をみせる。すなわちホスト国生まれの二世代目の同化は、生まれによって決定するのではなく、ホスト社会における民族差別、労働階層分化、インナーシティの下位文化などに影響される。結果的に上昇的な同化を見せるのか、社会的な不平等を乗り越えながら同化するのか、もしくは下降的な同化を見せるのか。二世代目の子どもたちの同化を規定していくのが子どもたちの心的状況だけではなく、親世代の就労や生活環境による階層分化や、ホスト社会の人種問題のありよう、就労構造、そして下位文化の状況によって水路づけられていく（Portes and Rumbaut 2001:55-69）。ポルテスらは、移民第一世代と第二世代を同じく扱うのではなく、世代によって生活構造が違うことに注目し、これをライフストーリーなどを駆使して明らかにした。

こうしたアメリカの移民二世代目研究は、定住しつつある二世代目という点にフォーカスが当てられているので、両国を経験した日系ブラジル人の子どもたちの事例にそのまま適用することは難しい。しかし移民の世代への注目と生活構造の違い、ホスト社会における移民の受け入れ態勢や、就労構造、下位文化の構造といったものが子どもたちの同化に影響を与えるというコンセプトは有用であると思われる。

3. 調査の概要

本研究の調査データは、主にブラジルに帰国した子どもたちへの聞き取りデータである。ブラジルでは2009年3月9日～18日にかけて、サンパウロ州とパラナ州の数都市でインタビューそして2009年9月～10月、2010年10月と二回に分けて追加・追跡調査をおこなった。対象者数とその出生地については、表1、表2のとおりである。

表1 インタビュー対象者数

	N:
子ども	31
親	16

*男性16名 女性31名

表2 インタビュー対象者の出生地

	N:
ブラジル生まれ	37
日本生まれ	8
その他	2

本調査の対象者の多は、90年代に日本へと移動し、そして2000年から経済危機近辺で帰国した人々である。2008年サブプライムショックによる世界的な景気低迷の影響から、急きょブラジルに帰国した日系ブラジル人については広く話題となった。こうして帰国した人々へのインタビューも可能な限り行った。

インタビューの依頼は、筆者の個人的な知り合いを通じて紹介してもらったが、歴史的にブラジル日本移民が数多く暮らす地方都市を中心に選定した。インタビュー対象者に、別の人を紹介してもらうスノーボールサンプリングをおこなった。

とはいえ、こうした調査では日系団体と関係を持つという点で、サンプリングに偏りが生まれることも予想される。そこで、別途現地教育局や役場（パラナ州教育局、サンパウロ州教育局、ロンドリーナ市役所、ツッパン市教育局、アサイ町役場、バストス町役場）の協力のもと、帰国した子どもたちが在籍する公立学校を訪問しインタビュー調査をおこなった。経済危機の影響によって帰国した人々が、高額な学費を必要とする私立学校ではなく公立学校を選択するのではないかと考えたためである。

インタビューには簡易なフェイスシートを作成したが、質問項目から外れた話題になっても自由に話してもらったほうが良いと考えたためである。その後の雑談等を含めて30分から2時間程度、話してもらいこれらをトランスクリプト化した。インタビュー以外にも収集した資料やノートを利用し個々の生活誌を作成することとした。

作成した生活誌のなかで特に子どもたちが困難を感じていると語った内容を抽出し、KJ法によって取りまとめ、4つのカテゴリー（「限定的なライフチャンス」「学科・学歴・資格のミスマッチ」「消費文化とインターネットによる困難の緩和」「下位文化との接続」）を析出した。こうしたカテゴリーの様相について、以下ではカテゴリーごとに特徴的な子どもたちの生活誌を提示する。ポルテスらの研究に従い、生活構造がより鮮明に浮かび上がると思われるからである。

4. ブラジルに帰国した子どもたちの生活誌

4.1 限定的なライフチャンス

4.1.1 ミズホ（20歳 女性）のストーリー

ミズホはブラジルで生まれた。父はブラジルでパン屋を経営していたが、パン屋がミズホの生後すぐに倒産し失職する。ブラジルで仕事は見つからず、生活のため就職斡旋をうけ日本へ行くことになった。現在、倒産による借金は全て支払い終えたが、家計は厳しく、父は日本に残って働いている。帰国してもブラジルには仕事がないと考えているからである。

祖父の家に預けられていたミズホは、小学校六年生の頃に渡日。日本の公立学校に通った。周囲のブラジル人の子どもたちは近所の学校ではなく、父が所属する派遣会社を集まってから、会社近くの学校に集団登校した。多くのブラジル人が登校する学校だったからか、先生たちはミズホたちとコミュニケーションをとるために努力してくれたという。そのおかげもあって先生とのお喋りは楽しかった。父が忙しかったので、

家では一人で過ごすことが辛かった。

小学校六年生で日本へやってきたこともあってか、ミズホは日本語が苦手だった。学校が開設する日本語教室で授業をうけていたが、それ以外の授業は、ブラジル人通訳が週一回サポートしてくれただけであった。日本語教室以外の授業内容はほとんど理解できなかった。ミズホは「日本社会とあまり関わらないままだったし、日本のことはよくわからなかった」という。勉強が苦手だったので、周囲のブラジル人と同じく中学校を卒業してから工場で働くことにした。

その後、ミズホの将来を心配した父親は、高校だけは卒業するよう家族の取り決めを作った。日本で進学できる見込みはなかったのでブラジルに帰国。私立高校に入学する。学校のコーディネータから7年生に戻ったほうがいいと言われ学年を下げることになった。日本にいるあいだほとんど勉強していなかったので、ブラジルの勉強は難しかった。日本の学校では内容が理解できなくても進級できたが、ブラジルの学校では勉強内容も多く留年もあるので、ブラジルの学校のほうが難しいとミズホは感じている。

父親はミズホに高校を卒業し工場以外で働いてほしいが、ブラジルで勉強させるための経済的負担が大きいく、勉強の難しさや落第のこともあるので、それならば再び日本で働きながら学校に通うことを提案している。そしてミズホには高校卒業後、日本の専門学校に行きなさいと話している。しかしミズホは「自分には工場で働くほかない」と考えている。「ブラジルの高校卒業資格が有効かわからない」し、日本で専門的な仕事ができると思えないからである。そして「今の日本は日本語を話せない工場でも働けない」と知り合いを通じて聞いているので、ブラジルの日本語学校に通いながら帰国時期を見計らっている。

4.2.2 アヤ (20歳 女性) のストーリー

アヤはブラジルで生まれ、8歳で日本へと渡った。日本語が全くできなかったので、日本へ行くのが嫌だった。渡日後、日本の公立学校の三年生に編入した。日本語は3ヶ月で話せるようになったという。しかし外国人というだけで目立ってしまい、周囲となじめず次第に学校へ行きたくないと思うようになった。語学よりも人間関係を築くことが難しかったという。そして中学校に入学したが、すぐに登校しなくなった。

アヤは「ブラジルのことを忘れることはなかった」。家ではポルトガル語で会話をしていた。雑誌やテレビなどはブラジルのものだけである。家庭はもちろん社会関係もブラジル人の家族や仲間ばかりだった。

アヤ：仲間とか周りとかブラジル人の友達がみんなほとんど仕事をしはじめて。自分の自由というのがみんなあって。

*：高校進学をしなかったのは？

アヤ：勇気づけられる人もいなかったから。(周囲も勉強が) 難しい難しいっていうから、すぐ諦めちゃった。(勉強しなかったことは) 後悔だね。後悔する・・・後悔する・・・

アヤは中学校を卒業するとすぐに仕事を始めた。周囲の友達や先輩らが学校に拘束されず働いている姿が、学校になじめず毎日の生活を苦しく感じていたアヤにとっては自由にみえたという。しかし、いまでは高校に進学しなかったことを後悔しているという。日本において高校を終えていないことで、ブラジルに帰国後、仕事が見つけれず「中途半端」になったからである。

アヤ：ブラジルもすごい資格社会ですよ。ちゃんと高校卒業しておけば・・・中途半端になっちゃうんですね。あっち(日本)で過ごしてたんですけど、あっち(日本)の学校で勉強したんだけど、ずっとブラ

ジル人。もし大学を卒業したとしても、ブラジル人であることは消えないということがあるし。でもこっちに帰ってくると、日本人、日本人とみられることもあるし。

アヤは自分のアイデンティティが「中途半端」にブラジル人であり、日本人であるという。日本では自分をブラジル人だと感じていたが、ブラジルに戻ってくると、自分が日本人だと感じる。自分が何人かという悩みと共に、ブラジルで通用するような学歴・資格がないことを悩んでいる。

アヤは高校に進学せずに働き始め、2008年の経済不況で仕事を失った。日本で復職できる見込みが少ないことを知ると、職場で結婚した夫との間にできた娘のことも考えブラジルに帰国することに決めた。しかし帰国したものの、夫の仕事はもちろんアヤも学歴や資格が問題となり仕事が見つかっておらず、このままの状況が続けば再び日本に帰国しなければならないと考えている。アヤは帰国したにせよ工場でしか働けないと考えている。こうした状況を子どもたちに引き継いでほしくないと考え、娘たちには大学まで進学してほしいと話す。

ここでは、ミズホとアヤの事例を提示した。両者ともに日本の公立学校に通っていたが、ミズホは日本語をほとんど話すことができない。アヤは話すことはできるが、読み書きはできない。学校でのイジメや勉強の難しさから、両者ともに学校に行かなくなる。ミズホもアヤもモデルケースとして周囲のブラジル人の友人や先輩をみて、工場で働くこととなった。ミズホは父親に請われブラジルで高校進学をしようとするが、勉強についていくことが難しく学校に行かなくなる。学校に行かなかったことで、両者ともに学校を通じての就職というルールから外れている。

しかも高校卒業資格など学歴・資格のミスマッチから、ブラジルに帰国後も仕事を見つけられず再渡日を考えている。ミズホは時期を見て日本に帰国するつもりでいる。アヤはこのままブラジルに滞在するつもりだが、夫が失職すれば日本に帰らなくてはならないという。両者ともに、日本に帰国すれば、外国人であることや学歴を理由として、再び工場で働く以外にないと考えている。このように、日本でも限定的なライフチャンスしか持たなかった子どもたちが、ブラジルに帰国してもそのチャンスを拡大できないままである。

4.3 学科・学歴・資格のミスマッチ：ファビオ（17歳 男性）のストーリー

前項でみたミズホやアヤのように、学歴や資格のミスマッチによってこれまで勉強してきたことが通用しなくなるという話も数多く収集できた。ファビオもまた学歴・資格のミスマッチの強い影響を受けている。

ヘナトとマルセーラ両親は五歳になる長男レオを連れて日本へと渡り二男ファビオが生まれた。2004年にレオが、次いで2006年にファビオが帰国、2008年に両親が帰国し家族全員が帰ってきた。デカセギの資金を元に郊外に住宅を建て、大学で勉強中の長男以外の3人で暮らしをしている。

日本で一家は、あまり外国人が暮らしていない山間部で過ごす。別段生活支障があったわけではなく周囲とのコミュニケーションも非常にうまくいっていた。日系人ではない母親のマルセーラも地域と交流する中で日本語能力を上達させていった。しかし、ブラジルでの生活経験をもつレオが日本に馴染めず大学受験に失敗。その後、ブラジルならば挽回できるのではないかと考え、ブラジルに帰国することになった。

レオを一人にできないと、中学校卒業を待ってファビオとマルセーラはブラジルに帰国した。父親のヘナトが単身日本に残って仕送りを続け、ファビオのブラジルでの進学先を見つけた母親マルセーラが再度渡日した。両親は日本での生活に満足していたが、しかし家族は全員一緒に暮らすべきだと考え、ヘナトとマルセーラはブラジルへと帰国した。

二男のファビオは日本の公立学校に小、中学校通っていた。日本語だけの生活をしてきたため、家庭でマルセーラがポルトガル語の読み書きを教えていた。ブラジルに帰国後は私立中学校に進学した。

日本でファビオは勉強が好きではなかったが、成績が上がり始めていた。すると勉強することが楽しくなり、英語検定など資格試験も熱心に受験していたが、ブラジルへ渡ったことでこれまでの努力が通用しなくなった。「数学と理科は簡単ですよ…その他は」という。

ファビオ：歴史とか・・・地理とか・・・全然違うじゃないですか。わからなくて点数取れないですよ。将来怖いです。やっぱり。こっちには落第も退学もあるし。次の学年にあがらないという不安が・・・大学受験が近づいていくときつくなるんですよ。勉強してもいけるかなって・・・そこが問題です。難しいです。

家族はファビオが大学進学すると信じており、手助けできることは出来るだけするつもりだという。ファビオも父親が日本で車好きだった影響もあり、車のデザインを仕事にしようと考え、大学進学を目指しているが、勉強の難しさから大学受験を考えるのは怖いという。

今でもファビオはインターネットを通じて、日本の友人らと連絡を取り合っている。友人らの大学受験の話にすこし羨ましさ感じている。現状、日本に帰ることは難しいが、将来留学生として日本に渡り、可能ならば日本で働きたいと考えている。

ヘナトもマルセーラも現在無職。ヘナトは渡日前まで市役所で働いていたが、日本から帰国後ブラジルが資格社会化していたことに驚いたという。日本で仕事の傍ら身につけた資格が通用せず、以前のような仕事を選ぶことができず苦勞している。マルセーラは職業学校に通学し就職することを目指している。帰国にあたり、ブラジルの実情をもっと調べるべきだったと後悔していると話す。

ファビオの事例からわかるように、地理や歴史など、主に教育を受けた国の影響が色濃くでる科目で子どもたちは困難を抱えている。中等、高等教育と段階を経てブラジルにおける教科科目の難度もあがっていくが、全く下積みのない子どもたちにとって、これについていくことは非常に難しい。

また先述したアヤやミズホの事例のように、今日のブラジル社会では、高校卒業資格や、大学卒業資格がなければ就職することもできない。ファビオもセルージオの事例と同じく、日本にいればもっと「うまくいくはずだった」という気持ちを持っている。また長男のレオはブラジルならば大学進学できるはずだと考え帰国している。レオは一年間の浪人期間中、両親らの助けを受けて補習学校に通い猛勉強の末、私立大学に入学することができた。いずれにしても、学科・学歴・資格のミスマッチは、それが通用しないだけでなく、子どもたちのライフチャンスを狭め、必要以上の努力がかせられる要因となるのである。

4.4 消費文化とインターネットによる困難の緩和：ユカのストーリー（14歳 女性）

ファビオの事例にもみられたが、消費文化やインターネットは子どもたちの生活に少なからず影響を与えている。とくに特徴的だと思われるユカの事例についてここでは紹介する。

日本で生まれたユカは、保育園から小学校2年生までを日本の公立学校で過ごした。ユカがあまりにもポルトガル語を話せなかったことを両親が心配し、ブラジル人学校への転校を決めた。

その後ユカは小学校3年生から小学校5年生までブラジル人学校で勉強した。ユカは「日本の学校はいろんな体験ができるが、ブラジル人学校にはない」と感じていた。すでに日本語での会話が主だったので、プ

ラジル人学校に転校後、勉強はもちろん読み書きもできなかった。そのため一時は一年生の内容に戻って勉強していたが、ほとんどついていけなかったという。ブラジル人学校での時間は日本語が通じる友人と共に過ごした。父親からは「家ではポルトガル語で話さない」と言われていたが、母親と兄弟とは日本語の方が話しやすいため日本語で会話していた。

ブラジルには父の里帰りに合わせて何度か足を運んだ。父の故郷であるサンパウロ奥地の町は、日系人が作った町でありいまでも数多くの日系人が生活している。友人の多い父が帰国すると、多くの人々が出迎え歓迎してくれたという。そんな人々の優しさに、ブラジルでの生活も悪くないと考えた。帰国を希望していた父を一人にできないと考え、共に帰国した。

しかし、生活をはじめると父の故郷であるサンパウロ州の奥地の町には、日本のように商店や遊び場がないことに落胆したという。また近隣の比較的大きな町に出るのも容易ではなく閉塞感があった。

日系人が多い町といっても、日本語を話せるのは高齢者が多く、同年代は少ない。片言のポルトガル語で同年代のブラジル人と話しても話題が合致しない。ユカによれば、同年代のブラジル人は恋人のことをよく話題にするが、ユカが興味を持っているのは漫画やアニメである。ブラジルの学校に漫画やアニメについて話す相手はいない。ブラジルに帰国後、学校に通っていたが友達はできなかった。日本滞在中ブラジル人学校で勉強していたにもかかわらず、ブラジルの勉強は難しく二回も留年してしまった。

町の若い日系人グループについては「なんか私とは違うよ」という。なぜかと聞けば「だってみんな『太鼓』とかマジになってやってるんだよ？」と話す。伝統的な日本文化が残る町では、日本語の継承はほとんど行われていないが、文化の継承については現在も活発で、柔道や太鼓はユカと同年代の日系人の子どもたちが参加している。しかしこうしたグループともユカはうまくコミュニケーションできない。

ユカは「自分は漫画、アニメなどが好きだし、日本語で話す方が好き」という。「それにアニメや漫画は日本語だし安心する」。そこで二カ月に一回程度、高速バスで片道八時間程度をかけサンパウロに足を運び、日本の漫画やアニメなどを購入する。またインターネットでも熱心に情報を集めている。イラストを描いてファンサイトに投稿したり、原作に基づいたサイドストーリーを描いたりしている。日本にいた頃の友人との連絡が途絶えてしまったが、インターネット上のアニメのファンサイトで、チャットをするのが楽しみだという。サイトに集う知り合いが一番の仲間であり理解者だという。

現在は学校に行きながら、ポルトガル語が必要とされないスーパーマーケットで小遣いを稼ぐためのアルバイトをしている。だが一生この町で過ごさなくてはならないのかと考えると、時々死にたいと思うようになった。そこで都市部に出ようとしたが、大学卒業資格を有していないユカには仕事がなかった。

ユカはその後日本に帰国、現在は日本でアルバイトをしながら生活をしている。ユカ、ファビオなど日本で受容していた消費文化が忘れられないことで、ブラジルでの生活に物足りなさを感じると語る子どもたちは多かった。子どもたちにとって、漫画やアニメはそのコンテンツの面白さだけではなく、ユカの言葉を借りれば「安心する」コンテンツでもある。見慣れた絵やストーリーと日本語。これらはブラジルで求めることが難しいものであり、ユカのようにサンパウロ市中心部にある日本街まで購入しにくる子どもたちは多かった。

このように、日本から帰国した子どもたちは、盛んにインターネットを活用している。メールだけではなく、リアルタイムで会話ができるスカイプやチャット機能を使うことで、日本と直のコミュニケーションをおこなうことができる。そして部屋から一歩も出ないことでブラジルの情報を遮断する。インターネットを通じてリアルタイムに友達とコンタクトを取り続けられれば、「日本の部屋」にいるのと変わらない状況がそこ

に生まれる。ユカにとって消費文化やインターネットは「安心」のためのツールである。しかしそれに依存するあまり、最近では新たな社会関係が作れないとユカは感じている。

4.5 下位文化との接続：リカ（17歳 女性）のストーリー

最後にとりあげるのがリカの事例である。リカは滋賀県で生まれた。小学校5年生の頃、両親の仕事の都合により名古屋へと引っ越しをした。名古屋で通い始めた小学校でポルトガル語を喋ってしまい「ガイジン」と揶揄されるなどイジメにあう。外国語を話すだけで「ガイジン」扱いされることに傷つき、徐々に学校から足が遠のき中学校3年生途中で学校に行かなくなった。

両親はデカセギのために日本へとやってきた。両親とも仕事が忙しく家で顔を合わせることも少なかった。学校に行かなくても注意されなかった。時間を潰すために他校の友達とコンビニ前などで深夜までお喋りをしていた。頻繁に店先に居座ったことで、店員に怒られたことがいい思い出になったという。

2008年の経済不況後、両親は失職。家族は仕事を求めながら日本に残っていたが、貯金が無くなりそうになり帰国した。リカによれば「ほんとイキナリ、『来月くらいにブラジル行こっか』って話になって」というように突然帰国することになった。リカによると、両親は勝手にわかるブラジルへの帰国にどこか安堵する姿を見せていた。リカにとってブラジルはただの外国でしかなかったが、日本にいても「このままじゃダメになるばっかかな」と思い帰国に同意した。帰国後、家族は仕事を見つけるものの多忙となり、子どもたちの面倒が見られない状況が続いた。両親の故郷はサンパウロ州奥地にある小さな町だったので、仕事が見つからず、近隣の町まで出向いて求職中である。

リカは私立高校に進学するが、授業は「ほとんど意味分かんない」。授業中は日本と同じく寝てしまうことが多かった。学校でも日本語を話すことができる同級生や上級生らと喋ること以外にすることがなく、学校にも行かなくなり町をぶらつくようになる。前項で見たユカのように、リカは「田舎でなんにもないこんなところでどうしたらいいの」と話す。

*：日本に帰りたいんだ？

リカ：帰りたいですね。

*：日本？ どうして？

リカ：日本が懐かしい。

*：例えば？

リカ：ブラジルは友達はあるけど、ほんとに仲良い子はできないみたい。やっぱ言葉も違うし、食べ物とか、文化とか習慣とか全部違うから。日本に戻りたい。けど、不景気だから。みたいな。

リカはいわゆる町の「やんちゃな子どもたち」と交流をもつようになる。麻薬や暴力事件で町を騒がせていることもあって、両親や学校の教師からも心配されたが、「やってることは日本と一緒」「日本でもしとったし」「どうせ遊びだし」と言って話をきこうとしなかった。そして、時折学校に顔を見せ、日本語を喋れる同級生とお喋りをする。こうしたリカを心配し、よりブラジルで生活するために、日本語を使うべきではないと説得したうえで、教師らは日本語が喋れる生徒を別のクラスに移してしまう。

リカ：しかも！ ちょっと聞いてください！ クラス、あたしのクラス！ 日本語喋れる人がいないんですよ。でもなんか1年にも2年にも、いるんですよ、そういう子が。で、あたしほんとは1年の年なんですよ！

で、なんでそこのクラスに入れないの？みたいな。かえやがったんですよ！日本語喋れる子もいるし。なんでそこ考えないの？みたいな。日本語喋れる・・・ほんと何か最初は、ここ入る前は全然、ほとんどもうポルトガル語喋れなくて。友達もいないし、みたいな感じだったんですよ。だから日本語を喋れるところにいれてくれてもいいじゃん、って。しかも日本語喋れる子いないとか言って嘘ついて！もう絶対日本に帰る。自分のお金で帰る！

この事件をきっかけとしてリカは学校に来なくなってしまう。その後、リカの両親に仕事が見つかり、別の町へと引っ越すことになった。日本に帰ったとしても、あるいはこのままブラジルに残ったとしても、リカには苦しい状況が予想される。こうしたリカの事例のように、日本での不就学、不登校、そして下位文化との関係が、ブラジルにおいても引き継がれてしまう。

その背景には日系人の歴史的な経緯も伺える。すなわち、ブラジル日本移民は農業移民としてサンパウロ州やパラナ州の奥地で植民地を切り開いた。したがって彼らの故郷となるのは大都市圏だけではなく、奥地の小さな町というケースも少なくない。町の中心に位置づく教会を起点とした一本の国道を両脇にいくつか小さな商店が立ち並ぶ。町の周囲には広大な農地が広がっているというのがスタンダードな街並みである。

こうした、左も右も知らない環境で、日本語が使えないストレスを、子どもたちはため込んでいるがそれを解消する手立てはない。安心感やストレスの解消をユカは消費文化に求めた。リカの場合は、日本での振る舞いが「そのまま」通用する下位文化へと求めたのである。帰国後、両親からも仕事や求職に忙しく、子どもたちに時間をかけてやる余裕もない。孤立していく子どもたちが、頼れるのは「言葉が通じない」学校ではなく、「言葉の必要がない」「日本と同じ」仲間たちなのであった。

5. まとめと考察

本稿は、ブラジルに帰国した日本で生活経験をもつ日系ブラジル人の子どもたちの生活誌を提示することを通じて、帰国後の子どもたちに生じた困難を「限定的なライフチャンス」「学科・学歴・資格のミスマッチ」「消費文化とインターネットによる困難の緩和」「下位文化との接続」という四つの観点から明らかにしてきた。子どもたちの生活上の問題はこうした具体的なものとして語られており、「言語」や「アイデンティティ」といった問題とは違った複合的なものとしてみられた。以下では日本とブラジル間の日系ブラジル人の移動に関する社会構造的な要因と、個人的な要因に分けて考察しよう。

社会構造的な要因として、日本とブラジル間における日系ブラジル人の「移動」の特殊性はこれまでも指摘されてきた。梶田ら（2005）が指摘した通り、日系人らの親世代は、定住者ビザを活用することで、比較的容易に日本へと渡り就労することができる。さらに、日系人らは職業斡旋のブローカーを活用することで求職や居住のリスクを軽減することが可能である。

こうした親の移動条件は、これまでの日系ブラジル人研究において「さしあたり」子どもに影響をあたえる一変数として扱われていた。しかし、帰国した子どもたちにとっては、周囲に明確な将来モデルがないこと背景に、日本への移動が自らの将来展望における有力な選択肢の一つとなる。比較的容易に移動できるという状況は、子どもたちにとって、日本／ブラジルどちらで生活するかという不安とともに、日本／ブラジルでうまくいかなければ、どちらかに移動すれば良いという選択肢にもなりえる。子どもたちは、自らの困難をブラジルで挽回するのではなく、日本に再度渡ることによって挽回することが可能だと考えている。

また、今回取り上げた事例のなかで共通して見られたのが、国家間の「教育接続の問題」である。ファビオのように親の期待も大きくさまざまなフォローがあったものの、日本で学ばなかった文系教科に苦戦し、

大学進学に強い不安を感じている事例もあった。またミズホのように、日本でもブラジルでも学校で勉強ができず、家族の労働力としてデカセギするしか選択肢が無くなってしまった子どもたちもみられる。日本にせよブラジルにせよ、学校教育で伝達される教科内容はナショナルなものに固定されている。ポルトガル語を理解することができても、日本史を学んできた子どもがブラジル史の試験に対応することは不可能である。評価されるのは卒業証明書など、一定の公的証明書であるため、学年途中での帰国は子どもたちにとって不利益しかもたらさない。こうした教育接続にまつわる困難は、個人の努力不足として評価されることもあれば、子どもたちが語るところの国家間移動につきまとう「しかたがない」ものとして捉えられてしまう。しかし、日本語ができても日本で適応できず、ポルトガル語ができてもブラジルに適応できない子どもたちが一定数みられる。国家間のカリキュラムの不一致や他国の教科内容を評価できない状況は、子どもたちにとってしてみれば外的要因以外の何者でもない。これらの是正が今後求められることであろう。

また両国を繋ぐ今日的な有り様の一つに、インターネットをはじめとしたトランスナショナルなメディアの影響が随所にみられた。アヤが日本滞在中、ブラジルメディアから情報を得たことで、日本での生活に馴染めなかったと語っているが、逆にユカの事例ではブラジルに帰国した子どもたちが、メディアを通じて日本の情報を得ることでブラジルに馴染めないという事例が見られる。メディアのグローバル化によって、日本社会の文化や情報が、デカセギ帰りの人々やインターネットを通じた社会的送金 (social remittance) として活発にやり取りされる。消費文化や社会情勢に関する情報が、日本—ブラジル間を常に行き交うことに加え、容易になった連絡手段やソーシャルメディアを通じ社会関係の拡大や維持にも活用される。この社会的送金は、二国間の空間を越えた繋がりを指し示すが、ポジティブな結果だけを生むのではないという点が重要である (Levitt 2009)。

日本とブラジルを接続するメディアは、ブラジルに帰国後の困難を隠蔽するものとして活用されるケースも見られたが、ブラジルコミュニティから得られない安心感をメディアによって獲得するケースもみられた。日本の情報をいち早く手に入れるだけでなく、オンライン上でオンタイムで繋がる事が可能となることでメディアへの依存は深くなる。それをどのように評価するかは一層の研究が必要だが、今回取り上げた事例のように、日本から離れたことによって生じた苦しみをメディアによって代替し、日本の情報を取り入れ続けることでブラジル社会との接点を失い、再び日本へ渡るほかなくなるといったケースは今後も見られるのではないだろうか。

次に、個人的要因についてみてみよう。「言語」や「アイデンティティ」の問題は語りの全般でみられる土台のようなものである。こうした土台は直接的に語られることはなく、語りの背景にある。もちろん帰国したばかりの子どもたちを対象としたというデータの限界もある。むしろ、子どもたちの多くが語ったのは、教育年数や就学段階の問題である。何歳の頃に国家間を移動したのか、そしてどの学校段階で日本／ブラジルで教育を受けたのかは、学校適応の難度を規定するのはもちろんのこと、その後の進路選択や将来展望を考える上で重要である。

教育年数にまつわる問題については、中国出身者の日本における進路選択に関する鍛治 (2008) の研究が示唆的である。鍛治によると、日本の学校システムに適応しているのが小学校時点で日本に渡ってきた1.5世 (6-12歳) である。他方で1.75世 (0-5歳時渡日) は日本に適応する一方で、高校進学の放棄を特徴とする学校システムへの不適応を起こすという知見を導いている。

この1.75世の学校システムへの不適応を説明するにあたり、鍛治は、アメリカのベトナム移民を調査した Zhoa and Bankston III (1988) らの研究を参考とした。そして1.75世の不適応は、日本語能力や第二言語の運用能力ではなく、親子間の葛藤や日本人化する子どもたちを管理 (統制) するエスニックコミュニティの

不在によって引き起こされる説明している。確かに本稿の事例でも、日本語やポルトガル語の運用に苦がなくとも、その後の学校システムへの不適応がみられ、その共通点が見いだせる。

渡日時の世代年数をみたのが表3である。ここから日系ブラジル人の子どもたちの多くが年少時点で渡日しているという傾向がみられる。そして世代ごとに具体的な生活誌を見渡したとき、鍛冶の知見との違いがみられた。まず、学校システムに適応し易いとされる1.5世（10名）のなかには、本稿で取り上げたミズホ、アヤ、リカらの事例が含まれる。しかし、3名とも日本の学校システムはもちろん、ブラジルの学校システムにも適応することが困難であった。また1.75世の事例を今回取り上げることができなかったが、ブラジルに馴染むことができずに日本に帰りたいがる事例もあれば、ブラジルで大学進学を果たしたケースもある。

表3 渡日時の移民世代

	N
1.2世（13-17歳時渡日）	2
1.5世（6-12歳時渡日）	10
1.75世（0-5歳時渡日）	13
2.0世（日本生まれ）	6

こうした、当てはまりの悪さは、鍛冶の知見を否定するというよりも、本稿の調査データがもつ限界はもちろんのこと、Portes and Rumbaut（2001）などが指摘しているように、移民の社会移動をみる時には、親世代や受入社会の文脈の違いを充分考慮しなければならないため、比較に限界があるということにある。

中国帰国者と比較したとき、特に日系ブラジル人の特徴として見いだせることは三点ある。第一に、中国帰国者と違い、日系ブラジル人の子どもたちは日本の公立学校という選択肢だけでなく、ブラジル教育と連続したブラジル人学校という選択肢が用意されていること。第二に、日系ブラジル人らの多くは「デカセギ」として日本にわたっており、帰国を前提にしているという点である。例えば、1.75世はブラジル人学校に通い、ブラジル教育へ接続されていくこと、逆に1.5世が、日本の学校に通い、日本に残ってしまっている点がある。第三に、日本渡日時の世代だけでなく、ブラジル帰国時の世代も考慮しなければならないことがあげられる。

とはいえ、鍛冶らが指摘する、親やエスニックコミュニティとの葛藤による管理（統制）の不在という知見は、本稿が対象とした事例についてもみられた。親との確執やエスニックコミュニティ（日本における日系人コミュニティ／ブラジルにおける日系人コミュニティ）へ参入していない子どもたちは少なくない。子どもたちを管理（統制）する者がおらず、見習うべき生活モデルも頼るべき仲間もないことで、帰国後の生活に困難が生じてしまうケースがみられた。リカの事例ではそうした論点が浮き彫りになっている。日本において、リカを管理（統制）する親や学校の不在から不登校となった。そしてブラジル帰国後も学校の勉強についていくことが出来ず、不登校となる。日本においても、ブラジルにおいても、「やんちゃな子どもたち」と関係を作る以外に選択肢がなくなってしまった。

これまで、構造的要因と個人的要因から、ブラジルへと帰国した日系ブラジル人の子どもたちのコンフリクトをみてきた。紙幅の関係から充分、論を展開できなかった。要因間の構造化は次稿にておこないたい。指摘しておかなければならないのは、コンフリクトが顕在化する文化適応や教育達成といった側面は、ある時点を取り上げて成功や達成を指摘する他ない。しかし、教育とは通時的に行われるものであるため、ある時に困難は社会上昇のきっかけにもなり得る。また、子どもたちが保持している言語能力、学力、学歴、資

格といった文化資本をどのように活用し運用するかは、いつ、どこで、どのように生活するかによっても持つ意味が変わるため、一時点から結論づけることは難しい。

本稿は、日本とブラジルの間を移動する子どもたちが、移動することで引き受けることになるコンフリクトに注目し検討してきた。改めて考えると、国家間を移動して生じたギャップを適切に埋めることができれば、大半のコンフリクトは軽減することもできるかもしれない。あるいは、コンフリクトを糧にしてバイカルチュラルな生き方が選択できるかもしれないが現状は大きな壁がある。国家という壁である。

近代教育は国民教育を前提としている。子どもたちにとって国境とは、地理的、行政的なものだけでなく教育的なものとしても存在している。こうした国境を通るため、個人的な能力や資格をめぐる「パスポート」の充実はもちろんのこと、両国の協力関係において一定の便宜を図り、移動に伴うリスクを低減させることが今後必要である。が、しかしそれは同時に、両国の移動を容易なものとし、よりいっそうの国家間の移動を誘発する可能性にも繋がる。そうしたとき「一方の国では無理なら、別の国に自分だけでも行けば良い」という子どもたちの生存戦略が、場当たり的な選択であるとしてネガティブなものとして受け止められるか、それとも子どもたちのライフチャンス積極的に拡大するものとしてポジティブなものとして捉えられるのか。そもそもこのように国家間を移動する子どもたちを適切に評価する枠組みの不在もまた今後の課題となる。

<参考文献>

- Brettell, Caroline B, Hollifield, James F. 2007 Migration Theory: Talking across Disciplines. Routledge.
- Casteles, S. 2007 Twenty-First-Century Migration as a Challenge to Sociology. Journal of Ethnic and Migration Studies.
- Global Commission on International Migration, 2005 Migration in An Interconnected World: New Directions for Action, Report of The Global Commission on International Migration.
- Guarnizo, L. E. 1997 The emergence of a transnational social formation and the mirage of return migration among Dominican transmigrates. Identities v. 4, pp. 281-322.
- 広田康生編著 1995 『多文化主義と多文化教育』明石書店.
- 梶田孝道・丹野清人・樋口直人 2005 『顔の見えない定住化』名古屋大学出版会.
- カースルズ, ステファン・ミラー, マーク 2011 『国際移民の時代 第4版』関根政美・関根薫監訳、名古屋大学出版会.
- キーリー, ブライアン 2010 『よくわかる国際移民 グローバル化の人間の側面』濱田久美子訳、OECD編.
- 熊崎さとみ・天野弥生 2007 「ブラジルへ帰った子ども達—日本での滞在・就学経験が帰国後に及ぼす影響と課題」『信州大学人文社会科学研究』信州大学.
- 児島明 2006 『ニューカマーの子どもと学校文化—日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィー』勁草書房.
- Levitt, P & Deepak, L. 2009. Social Remittances Revisited, Harvard University.
- 森田京子 2007 『子どもたちのアイデンティティ—ポリティックス—ブラジル人のいる小学校のエスノグラフィー』新曜社.
- 光長功人・田淵五十生 2002 「ブラジル人の子どもたちは、どのようにアイデンティティを容れさせるのか?—帰国後の再適応を観察して—」『奈良教育大学紀要 人文・社会科学』奈良教育大学.
- 宮島喬 2002 「就学とその挫折における文化資本と動機づけの問題」宮島喬・加納弘勝編著『国際社会2 変容する日本社会と文化』東京大学出版会.
- 村田翼夫他編 2000 『在日ブラジル・ペルー人帰国児童生徒の適応状況—異文化間教育の視点による分析—』科学研究費補助金成果報告書.
- 中島透・根川幸男 2005 「ブラジルにおける在日経験帰国児童生徒 (CAEJ) の日本語実態調査」『小出記念日本語教育研究会論文集』.
- 太田晴雄 2000 『ニューカマーの子どもと日本の学校』国際書院.

- Portes, A 1995 Children of immigrant: Segmented assimilation and its determinants, Portes, A(ed.), The Economic Sociology of Immigration: Essay on Network, Ethnicity, and Entrepreneurship, New York: pp. 248-280.
- Portes, A&Rumbaut, G. 2001 Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation. University of California Press.
- 関口智子 2003 『在日日系ブラジル人と子どもたち—異文化間に育つ子どものアイデンティティ形成』明石書店.
- Smith, R. C. 2003 Diasporic memberships in historical perspective. International migration review. V.38(3):pp. 970-1001.
- 志水宏吉・清水陸美編著 2001 『ニューカマーと教育—学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって』明石書店.
- 丹野清人 2007 『越境する雇用システムと外国人労働者』東京大学出版会.
- 恒吉僚子 1998 「ニューカマーの子どもと日本の教育」佐伯胖編著『国際化時代の教育』岩波書店.
- 渡辺雅子編著 1995 『共同研究 出稼ぎ日系ブラジル人』明石書店.
- 山ノ内裕子 1999 「在日日系ブラジル人ティーンエイジャーの「抵抗」—文化人類学と批判的教育学の視点から」『異文化間教育第13号』 pp. 89-103アカデミア出版会.
- Zhou, M. 1997 Segmented assimilation: Issues Controversies, and Recent Research on the New Second Generation, International migration review, V.31(4):pp.975-1008.

What was brought by the children who crossed borders: the life story of Nikkei Brazilian children who returned to their country

YAMAMOTO Kousuke

In a globalized world, a person who crosses borders and lives in places different from where they were born is not rare. The “acceleration” on migration across borders has become more noticeable. An increase in migration has become a one-sided issue among international societies. Research is being conducted within different fields of the social sciences.

This report will focus on Nikkei Brazilian children who have migrated. The back and forth movements between Brazil and Japan began in 1908. More recently, the focus has been on the increasing number of people who have moved from Brazil to Japan as temporary workers. In 2008, the Brazil-Japan immigration process completed 100 years. Due to the world recession, many Brazilians returned to Brazil.

This report will focus on the different reasons that children returned from Japan to Brazil. The life history of the Nikkei Brazilian children who traveled back and forth between Japan and Brazil will be used to discuss the kinds of conflict related to the education of those children who migrated between countries or who have had the opportunity to migrate. Conflicts experienced by the children who moved between countries and the one-sidedness of their lifestyles will be discussed.

Keyword: Nikkei Brazilian children, Cross borders, Immigration and Education